

音読

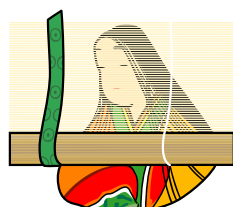
古文の文章の言葉のひびきを楽しもう
古文音読プリント1・2の学習の手引き

年

名前

古文音読の手引き

古文の文章の言葉のひびきに親しもう



音読を通して、古文の文章の表現に親しみましょう。

親しみやすい古文の文章をしようかいています。音読をしてみましょう。

音読することによって、文章のリズムや言葉のひびきを感じることができます。

暗唱するくらいに何回も読んで、長く親しまれている文章の美しさを味わいましょう。

昔の人のもの見方や感じ方を知ろう

解説文を読んで、昔の人のもの見方を知りましょう。

古文について解説した文章をプリントにのせています。

解説文を読んで大まかな内容を知り、昔の人のもの見方や感じ方を今の自分と比べてみましょう。

『枕草子』～第一段～ 古文音読プリント1・2

作品について

枕草子
まくらのそうし

清少納言
せいしょうなごん

春はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは、
やまぎわ

少し明かりて、紫だちたる雲の
あ むらさき

細くたなびきたる。

春は、夜明けがよい。しだいに白
んでいく山に接する空が、ほのかに
明るくなって、紫がかった雲が細く
たなびいているのがよい。

『枕草子』（まくらのそうし）は、平安時代中期に女流作家、清少納言（せいしょうなごん）により書かれた随筆（ずいひつ）です。

随筆とは、筆者の体験や見聞きしたことを題材に、感想を交えて書いた文章です。

古文1のプリントは、『枕草子』第一段より、「春は曙（あけぼの）」と「夏は夜」の部分のをせています。

古文2のプリントは、同じく『枕草子』第一段より、「秋は夕暮」と「冬はつとめて」の部分のをせています。

四つの季節それぞれに、「季節―好きな時間」「その情景や感想」で構成されています。清少納言が、四季のどんなところに感動しているかが分かり、四季に関する日本の伝統的なもの見方や考え方にふれることができます。

音読

長く親しまれている古文の文章の
言葉のひびきを味わいましょう①

年

名前

古文Ⅰ

『枕草子』

（まぐらのそうし）は、清少納言によって書かれた平安時代の随筆（ずいひつ）です。
随筆とは、筆のおもむくままに自由に見聞や感想、意見を書きつづる文です。

まぐらのそうし

枕草子

せいしょうなごん

清少納言

春はあけぼの。

ようようしろく

やまぎわ

やうやう白くなりゆく山ぎは、

すこしあ

むらなき

くも

少し明かりて、紫だちたる雲の

ほそく

細くたなびきたる。

なつ よる つき

夏は夜。月のころはさらなり、

やみ

な お ほたる

お お く

ち が いたる

闇もなほ、蛍のおほく 飛びちがひたる。

ひと ふた

また、ただ一つ二つなど、

ゆく おかし

ほのかにつち光りて行くもをかし。

おかし

雨など降るもをかし。

（秋は夕暮れ…、冬はつとめて…と続く）

〔かい説〕

春は、夜明けがよい。しだいに白んでいく山にせつする空が、ほのかに明るくなって、紫がかつた雲が細くたなびいているのがよい。

夏は、夜。月が出ているときは言うまでもなくよい。やみ夜であっても、ほたるが多く飛びかっているのがよい。また、ほんの「二ひき」が、ほのかに光って飛んでいくのも風情がある。雨がふっても風情がある。

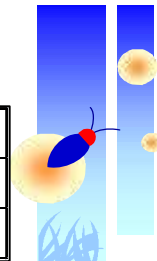
読んだ回数

（○で囲む）

11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢 しせい	よく聞こえる	すらすらと読める	暗 唱
私の評価 ひょうか （ ・ ・ ・ ）				
先生の評価 せんしんのひょうか （ ・ ・ ・ ）				

（ とてもよい ○ よい もう少し ）



音読

長く親しまれている古文の文章の
言葉のひびきを味わいましょう②

年

名前

古文②

『枕草子』は、四季の自然を観察したり、日常生活などをふり返って感想や意見、見聞き
したことが書かれています。言葉のひびきとともに、じょうけいを想ぞうしながら読みましょう。

まぐらのそつし

枕草子

せいしょうなごん
清少納言



あき ゆうぐれ ゆうひ

やま は たち

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、

からす

ね

みつつよつつ

ふたつみつつ

鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、一二三つなど

とび

さえあわれ

かり

飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小

く見ゆるはいとをかし。

あかし

ひ

おと

ね

いう

日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。

いう

しも

霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、

すみ

火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきつきし。

ゆ

昼になりて、ぬるくゆるびもて行けば、

ひあけ

はい

火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

〔解説〕

秋は夕暮れがよい。夕日が山のはしにとても近づいたところに、からすが巢へ行
こうと、三羽四羽、一羽三羽などと飛び急ぐのさえも、しみじみとしたものを感
じる。まして、かりなどが連なつて、とても小さく見えるのは、とてもふぜい
がある。夕日がしずんで、風の音、虫の音などが聞こえるのは、何ともいえない。

冬は早朝がよい。雪がふっているのは言うまでもない。しもがとても白いのも
またそうでなくても、とても寒い朝に、火などを急いでおこして、炭を持ち運ぶ
のも冬の朝にふさわしい。昼になり、寒さがゆるんでいくと、火おけの炭も白
はいばかりになつてきてよくない。

読んだ回数 (○で囲む)	
11	1
12	2
13	3
14	4
15	5
16	6
17	7
18	8
19	9
20	10

	よい姿勢 しせい	よく聞こえる	すらすらと読める	暗 唱
私の評価 ひょうか (. . .)				
先生の評価 (. . .)				

(とてもよい ○ よい もう少し)